

「何気なく、さり気なく、それとなく」の意味分析

李 澤熊

キーワード 副詞、連續性、相互の意味関係、意図、非意図

1. はじめに

本稿は、副詞（的機能を持つ表現）「何気なく、さり気なく、それとなく」の3語を考察対象とする¹。筆者は、拙論（2000）で、この3語を含む主体の意図に関わる副詞（的機能を持つ表現）15語²の性質について考察した。その結果、考察した語は「情態副詞」と「陳述副詞」の両方の性質を持ちつつ、語によってその一方の性質をより強く持つという連續的な性質を持っていることが明らかになった。また、15語の性質をさらに詳しく検討した結果、5つのグループに分けるのが適当であることを示し、その上で、副詞の中でも位置づけが連續的であると同様に、下位分類した各グループ間も連續的につながっていることを指摘した。特に、本稿で考察する「何気なく」と「さり気なく」は非意図的であることを表すグループと意図的であることを表すグループの間で連續的に位置づけられると考えられるものである。そういう面で、本稿の考察はグループ間の連續性を確認することにもつながる。

先行研究としては、小矢野（1982）、福井（1983）、藤原他（1985）、田他（1998）がある。本稿では、これらの先行研究に負う面も少なくないが、いずれの先行研究も各語の個別の意味と相互の意味関係（類似点・相違点）の記述が十分とは言えない（詳しくは後述）。

本稿の目的は、以上の先行研究を踏まえて、上にあげた3語の個別の意味と相互の意味関係（類似点・相違点）を明確に記述することである。

¹: 現在刊行されているいくつかの辞書を調べてみると、「何気なく、さり気なく」はそれぞれ「何気ない、さり気ない」が見出し語として載せられている。つまり、見出し語の副詞的用法として扱われている。なお、本稿における引用例の容認度の判定は日本語母語話者によるものである。

²: うかつにも、うかつに、うかうか（と）、うっかり（と）、つい、思わず、無意識に、知らず知らず、我知らず、いつの間にか、いつしか、ふと（ふっと）、何気なく、さり気なく、それとなく。

以下、2. と3. では、相対的に意味が近いと考えられる「何気なく」と「さり気なく」、「さり気なく」と「それとなく」を対比し、各語の意味特徴及び類似点・相違点について考察する。4. は本稿のまとめである。

2. 「何気なく」と「さり気なく」

本節では、「何気なく」と「さり気なく」を比較し、それぞれの個別の意味と相互の意味関係を明らかにする。

まず、「何気なく」についての例を見てみよう。

- 1 三ヵ月ほどまえにぼくはこの記事を『ニューヨーク・タイムズ』で読んだ。まったくの偶然である。山口が本を返すときに包んできた新聞だったのだ。ぼくは大衆食堂でラーメンをすすりながらなにげなくこの記事を読んで、いかにもアメリカ娘らしいキャラの現実処理に感心した。(開高健『パニック・裸の王様』、p. 298)
- 2 1987年、チリのラスカンパナス天文台で学者の手伝いをしていた若者が、何気なくおんぼろ望遠鏡を大マゼラン銀河に向けてシャッターを切った。現像して仰天した。突如、太陽光度の百億倍もの明るさで輝く超新星が出現した。(毎日新聞、1996. 10. 4朝刊)
- 3 ある日の夕方、俊介は役所からの帰り道で小さな異常を発見した。町のまんなかを流れる川にかかった橋のうえを歩いていて、なにげなく下をのぞきこんだ彼は思わず足をとめてしまった。川岸の泥のうえにおびただしい数のネズミが集まっていたのである。(開高健『パニック・裸の王様』、p. 78)

上の例における「(記事を) 読む」、「(銀河に) 向けてシャッターを切る」、「(下を) のぞきこむ」という行為は、いずれも「特に何かを期待して行う行為ではない」と言える³。例えば、例1の場合、「たまたま山口が本を返すときに包んできた新聞の記事を大衆食堂でラーメンをすすりながら読んで、キャラの現実処理に感心した」というようにとらえられる。つまり、最初からキャラに

³: 福井(1983, p. 38)と小矢野(1982, p. 53)は「何気なく」について、それぞれ「特にこれといった意図をもたない」、「『目的や意図を持たずふるまうようす』も『目的や意図を相手に感じさせずふるまうようす』も表す」と記述している。本稿では、「特定の意図がない」という立場に立って記述していく。

関する記事を読もうとしたわけではないということである。また、例2の場合は、「超新星を発見したのは、偶然おんぼろ望遠鏡を大マゼラン銀河に向けてシャーターを切ったのがきっかけである」ということになる。つまり、最初から新星を発見しようとして望遠鏡を銀河に向けてシャーターを切ったわけではないということである。さらに、例3の場合は、「橋の上を歩いていて、たまたま下をのぞきこんだら、川岸の泥のうえにおびただしい数のネズミが集まっているのに気づき足をとめてしまった」ということになる。つまり、橋の下をのぞきこんだのは何かをもとめて行った行為ではないということである。

以上のことから、「何気なく」の意味は<話し手が>⁴⁾、「たまたま大衆食堂でラーメンをすすりながら、新聞記事を読む」、「偶然おんぼろ望遠鏡を大マゼラン銀河に向けてシャーターを切る」、「たまたま橋の下をのぞきこむ」といった<特別な意図を持たずに行行為をすることを表す>と記述できる。

次に、「さり気なく」を取り上げる。まず、先行研究を検討し、その問題点を指摘する。

福井（1983）と小矢野（1982）は「さり気なく」について、それぞれ「心に何か思うところがあるにも拘わらずそれを表立てない」、「目的や意図を相手に感じさせずにふるまうようすを表す」と説明している。確かに、以下の例は、「心に何か思うところ、目的や意図」を「表立てずに、感じさせずにふるまう」というようにとらえることができる。

- 4 彼は箱を投げだすと資材課の部屋へ走り、購入仮票を検査した。どの伝票も乱雑な判コでまっ赤になっていたが、日附をしらべて彼はすっかり事情がのみこめた。イタチの伝票はことごとく彼の出張中に発行され、山林課長の承認を得ているのだった。どの伝票にも彼の判はなかった。彼はだまって伝票と帳簿を資材課員にもどすと、その足で山林課の部屋へいった。運よく廊下の途中で便所からでて来た課長に出会ったので、彼はさりげなく寄っていき、いっしょに肩を並べて歩きながら世間話の

⁴⁾ 例3は、小説などでよく見られる手法で、話し手以外の人の客観的な様子を表しているように見えるが、実は話し手が文の中の登場人物（俊介）の立場に立って（登場人物の視点で）、描写していると考えられる。これについて少し補足すると、金水（1989、p. 123）は「小説や昔話などの地の文では、誰の心理状態でも自由に描写できるのであるから、始めから人称制限というものが存在しない」と述べている。また、このような小説や昔話の地の文を「語り」と呼んでいる。つまり、例3の場合も「語り」の文であると考えられる。以下、本稿では、各語の意味あるいは意味特徴を記述するにあたり、話し手と動作などの主体が一致しない時、それが「語り」の文である場合には、「話し手」という用語を用いて記述していく。

間へ探針を入れてみた。(開高健『パニック・裸の王様』、p. 92)

- 5 庄九郎は太刀をしづかにあげ、その足もとの首を、すばりと斬った。ころり、と濡れ縁にころがって、首が、不審そうに庄九郎を見ている。突然なことで、まだ自分が死んだとは思っていないのかもしれない。胴だけが、堂内に残った。内部の者も、この異変には気づかないであろう。庄九郎は蔀を持ちあげ、ごくさりげなく堂内に入った。(司馬遼太郎『国盗り物語』、p. 1251)

だが、次の例における「さり気なく」については、福井と小矢野の記述では十分な説明ができないと考えられる。

6 最近彼はよく遅刻するのでさり気なく注意した。

この場合の「心に何か思うところ、目的や意図」というのは、「彼をこれから遅刻しないようにさせる」ことであると考えられる。福井と小矢野の説明に従うと、「彼をこれから遅刻しないようにさせる」という「心に何か思うところ、目的や意図」を「表立てずに、感じさせずに」ということになって「これから遅刻しないように」という「心に何か思うところ、目的や意図」が彼に伝わらなくなってしまう。だが、例6の「注意する」という行為は、「これから遅刻しないように」という「心に何か思うところ、目的や意図」を彼に伝えるために行う行為である。問題は、その伝え方（注意の仕方）が彼の気分を害するような仕方ではよくないということである。つまり、彼にこれから遅刻しないように注意するが、その注意の仕方を「あまりたいしたことでないよう、目立たないようにする」ことであると考えられる。

以上のことから、本稿では「さり気なく」は「心に何か思うところ、目的や意図」そのものを「相手に表立てずに、感じさせずにふるまう様子」を表す場合に用いられると説明するより、「心に何か思うところ、目的や意図を達成するために行う行為の仕方に注目し、その行為を相手や周囲に目立たないような仕方で」行うことを表す場合に用いられると説明した方が適切ではないかと考える。また、「『周囲』に目立たないようにする」ということは、例5からもわかるように、主体の行為は相手以外の人、つまり「周囲に目立たないようにする」ということを表す場合もあると考えられるからである。

以上のこととを先にあげた例4、5に基づいて、もう一度確認してみよう。例4は、「彼は、山林課長を見かけたとき、日頃たまたま廊下で出会った時と同じように、軽い挨拶を交わすなどの普段通りのふうをよそおって寄っていった」

というようにとらえることができる。つまり、この場合は「山林課長に（彼が出張中に発行された）伝票の件について聞く」という「心に何か思うところ、目的や意図」を達成するために行う行為の仕方、つまり「寄っていく」いき方を「たいしたことないよう、目立たないようにする」というように説明することができる。

また、例5の場合も、「心に何か思うところ、目的や意図」を達成するために行う行為、つまり「堂内に入る」仕方を「周囲に（普段通りに）目立たないようにする」ということである。

このように「行為の仕方を目立たせないようにする」という説明なら、例4～6のようなケースをすべて問題なく説明できる。

以上、「さり気なく」に関する先行研究を検討し、その問題点を指摘した。以下では、「さり気なく」についてより適切な意味記述を提示する。

次の例を見てみよう。

- 7 私と内藤はみんなより少し先を歩いた。ソウルの繁華街である明洞を抜け、高速道路下にかかっている歩道橋を渡っていると、その端に幼い子供を抱いた女の物乞いが坐っているのが眼に入ってきた。私は足を早めるようにして通り過ぎたが、内藤はジーンズのポケットから小銭を取り出し、さりげなくアルミニュームの容器に投げ入れた。(沢木耕太郎『一瞬の夏』、p. 1227)
- 8 私がそれを口にすると、やはり崔に拒絶された。私はしぶとく交渉を続けた。
「ひとりくらい日本人が入っても、何も変わらんさ」と崔は言った。
「だったら、いいじゃないですか」
「韓国じゃ、最近はホームタウン・デシジョンなんて、そんなのはないよ」
「だったら、なおいいじゃないですか」
私はそう言いながら、ふと思い出したようなふりをして、バッグからアドバンスの四十万円が入っている封筒を取り出し、さりげなくテーブルの上に置いた。あまり品のよい作戦ではなかったが、見事に成功した。
(沢木耕太郎『一瞬の夏』、p. 1065)
- 9 赤川次郎さんという方は、実に奇妙な魅力を持った方である。青年っぽさを残した端麗なマスクに、さり気なく七・三に分けた髪。小柄な体躯にビジネスマンの休目的な装い。(赤川次郎『女社長に乾杯!』、p. 925)

以上の例における「投げ入れる」、「置く」、「分ける」という行為は、何らかの「意図」を持って行う行為であると言える。つまり、例7の「投げ入れる」は、「幼い子供を抱いた女の物乞いにお金をあげる」という意図を持って行う行為であり、例8の「置く」は、「崔さんに四十万円が入っている封筒を見せる」という意図を持って行う行為である。例9の場合の「分ける」も「格好良くする」という意図を持って行う行為であるということになる。

また、「投げ入れる」、「置く」、「分ける」という行為は、何らかの「意図」を持って行う行為であることから、主体にとってその行為は、何らかの意味で重要であると言えよう。だが、上の例からわかるように、主体の行為には『『相手』あるいは『周りの人』に何らかの意味で重要である様子が見られない』と言える。例えば、例7の場合は、「内藤は小銭をアルミニュームの容器に投げ入れる時、どうどうと投げ入れたのではなく、私または周囲に、たいしたことないよう、目立たないように投げ入れた」というようにとらえられる。また、例8の場合は、「四十万円が入っている封筒をたいしたことないよう、目立たないようにそっとテーブルの上に置いた」ということになる。さらに、例9は「周りの人に目立たないように、七・三に分けた髪型」というように読みとることができる。

以上のことから、「さり気なく」は<主体が><ある意図を持って行う自分の行為を>、「小銭を私または周囲に、たいしたことないよう、目立たないように投げ入れた」、「封筒をたいしたことないよう、目立たないようにそっとテーブルの上に置いた」、「髪を目立たないように七・三に分けた」といった<相手や周囲に目立たないように（何か特別な意味を持っていると思われないように）することを表す>場合に用いられると考えられる。

ところで、上の例1～3は「何気なく」を「さり気なく」で、例4～9は「さり気なく」を「何気なく」でそれぞれ言い換えることはできない。これは、「何気なく」は「特別な意図を持たずに行う行為」の場合に用いられるのに対して、「さり気なく」は「ある意図を持って行う行為」の場合に用いられると考えられるからである。つまり、例1～3の場合の「(記事を)読む」、「(銀河に向けてシャーターを切る」、「(下を)のぞきこむ」という行為には、特にこれといった意図が見られないから「さり気なく」は用いられない。逆に、上でも説明したように、例4～9の場合の行為は、いずれも意図を持って行う行為であるから「何気なく」は用いられない⁵。

⁵ 「何気なく」と「さり気なく」は、以下の例のように、人間以外の事柄を表す場合に用いられることがある。

①「花のポートレート、植物画が自然の豊かな北海道に今広がっています。何気なく

次のように、「さり気なく」は上に記述した<主体が><ある意図を持って行う自分の行為を><相手や周囲に目立たないように（何か特別な意味を持っていると思われないように）することを表す>という意味で一見説明できないうに思われる場合がある。

- 10 銀行の窓にもさりげなく（＊何気なく）花が飾られている。さすが、イギリス！

（http://www.edu-c.pref.miyagi.jp/lab0/99d2_1/saka/bank.html）

- 11 個室の冷たい蒲団の下に中判の大学ノオトが二冊、さりげなく（＊何気なく）はいっていた。（福永武彦『草の花』、p. 89）

だが、小矢野（1982、p. 51）にも指摘されているように、上の例はいずれもその背後には、人間の存在がうかがわれる。上の例における「花を飾る」、「蒲団の下にノオトをいれる」という行為は人間によって行われたものである。つまり、例10の場合、「（職員などが）銀行の窓に花を目立たないように飾った」ということである。また、例11の場合は、「ある大学生が周囲に蒲団の下にノオトをいれることが何か特別な意味を持っていると思われないように、目立たないように蒲団の下にノオトをいれた」というように読みとることができる。

ところで、上の例は、「さりげなく」を「何気なく」で言い換えることができない。この場合の「さり気なく」も（背後に存在していると思われる）人間の行為は「ある意図を持って行う行為」であると考えられるからである。つまり、例10の場合、これといった意図を持たずに銀行の窓に花を飾るのは普通考えられないということである。また、例11の場合も、普通「個室の冷たい蒲団の下にノオトをいれるという行為」はこれといった意図を持たずに行う行為とは考

味いている道端のタンポポひとつをとってみても、植物画的名（ママ）な見方をすると驚きがふくらみます。

（http://www.heco-spc.or.jp/evnt/econews/news_dat35.htm）

- ②彫刻が美術館を飛び出して、陽の光をうけ、まわりのみどりと溶けあって、さり気なく街かどに立つ。そんな文化の薫るやさしい街をつくっていきたい、と思っています。（<http://www.city.kitakyushu.jp/kensetsu/green/park/cyokoku.html>）

しかし、これは、小矢野（1982、p. 51）と福井（1981、p. 37）にも指摘されているように、「擬人法」と考えられる。なお、本稿では、「擬人法」について「人間でないものを、人間に見立てて表現する法」（半沢（1984、p. 16））と定義する。上の例では、「タンポポ」（①）、「彫刻」（②）を人間に見立てて表現しているということになる。

えられない。従って、<話し手が><特別な意図を持たずに行行為をすることを表す>場合に用いられる「何気なく」はこのような文には現れないものである。

今度は、「何気なく」と「さり気なく」が両方用いられる例を見てみよう。

- 12 そうして私の前の小さな流れの縁を一羽の鶴鳩が寂しそうにあっちこっち飛び歩いているのにぼんやり見入っていると、突然、私の背後のサナトリウムの方からその土手をうんうん言いながら重たそうに荷車を引いてくる者があるので、私は道をあけようとして立ち上った。見ると、それは一台の塵芥車だった。私は、とんでもないものがこんなところを通るんだなあと思いながら、道ばたの灌木の中へすっぽりと身体を入れながら、よそっぽを向いていた。が、その塵芥車がやっと私の背後を通り過ぎたらしいので、何気なく（さり気なく）ちらりとそれへ目をやると、その箱車のなかには、鐘詰の鐘やら、唐もろこしの皮やら、英字新聞の黄ばんだのやら、草花の枯れたのやらが、一種汚らしい美しさで、ぎつしりと詰まっていた。（堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』、p. 130）
- 13 昼休みの時間で、事務室には他に二、三人しかいなかった。ひとりで何をこそこそ調べているのかという、いつもの尾上なら当然発するであろう質問を七瀬は予想した。しかし、そうではなかった。
- 「やあ。昨日のデートはいかがでした」くぐもった声で尾上は言った。もし彼の記憶心像に沖の顔があらわれなければ、なんのことを言っているのか七瀬にはわからなかっただろう。
- 「ああ」軽くうなずいて笑いながら、七瀬はさりげなく（何気なく）学籍簿を棚に戻した。（筒井康隆『エディップスの恋人』、p. 68）

以上の例は「何気なく」を「さり気なく」で、「さりげなく」を「何気なく」でそれぞれ言い換えられが、意味は違う。まず、例12の場合、「何気なく」を用いた場合は、「私は、とんでもないものがこんなところを通るんだなあと思いながら、箱車の中に何が入っているか知りたいというような意図を持たずに、ちらりとそれへ眼をやった」というようにとらえることができる。これに対して「さり気なく」を用いた場合は、「箱車の中に何が入っているか知りたくて、それへ眼をやった。その時、私は荷車を引いてくる者に別に箱車を気にしていることを見せることなく、目立たない様子でちらりとそれへ目をやった」ということになる。

また、例13の「何気なく」の場合は「特に尾上を気にすることなく、普段通りの気持ちで学籍簿を棚に戻した」というように読みとることができる。これ

に対して「さりげなく」の場合は「尾上に何かたいしたことをしているような様子を見せずに、普段通りの目立たない様子でそっと学籍簿を棚に戻した」ということである。

3. 「さり気なく」と「それとなく」

続いて、本節では、「さり気なく」と「それとなく」を比較し、相互の意味関係を検討する。まず、「それとなく」についての例を見てみよう。

- 14 K君は授業中にいつもおしゃべりしていて、教科書は見当違（ちが）いのページを開いているだけ。先生がK君をじろりとにらみながら、それとなく注意する。
- 「みんながこうして熱心に勉強しているときに、教科書もろくに見ないでペチャクチャしゃべりどおしの人がいる。それは、だれだろうね」聞くなり立ち上がったK君、
- 「はいッ、それは先生です！」とたんに、教室内は笑いが爆発。
(<http://www.jeims.co.jp/daily/tyu/tsaka/97/1225tsaka.html>)
- 15 全国で同じものが使われてるのかはわかりませんが愛知県公安委員会ではこのテキストが配布されます。講習の際、担当官が出題されそうな部分をそれとなく言いますのでしっかり聞いてチェックしておきましょう。
(<http://www.aurora.dti.ne.jp/sog/information/gun/001.html>)
- 16 例によって壁に掲示されたメニューは分らなかつたが、聞いてみるのも面倒なので、またハンバーガーをコーヒーと共に頼んだ。実際、後になつて分つたことだが、ハンバーガーとかチーズバーガーとか、メニューにはいろいろあっても、せいぜいラーメンとチャーシューメンくらいの違いしかない。散らばつて坐っていた彼らから、なるべく目立たぬよう、それほど遠くもなく近くもない場所に席を見つけて腰を下ろすと、巨大なハンバーガーに勢いよくかじりついた。そうでもしないと、こんな雰囲気の中では食べ始めることも出来そうになかったからだ。口一杯にはおぱりながら、それとなく回りの人々を観察した。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』、p. 29)

以上の例における「注意する」、「言う」、「観察する」という行為は、何らかの「意図」を持って行う行為であると言える。つまり、例14の「注意する」は、

「K君を静かにさせる」という意図を持って行う行為である。また、例15の「言う」は、「出題問題を教える」という意図を持って行う行為である。さらに、例16の「観察する」は、「回りの人々の様子をうかがう」という意図を持って行う行為であると言える。

また、これらの行為は、相手や周囲に、自分の行う行為を「はっきり表さない、つまり、間接的に遠回しに表す」というようにとらえることができる。例えば、例14の場合は、「授業の態度が悪いK君に、直接的に注意するのではなく、『教科書もろくに見ないでペチャクチャしゃべりどおしの人がいる。それは、だれだろうね』というように、遠回しに注意する」ということになる。また、15の場合は、「出題されそうな部分をはっきり言うのではなく、この部分は5年前から毎年連続出題されているなどというように、間接的に、遠回しに言う」というようにとらえられる。さらに、16の場合は、「回りの人々を観察していることを知られないように観察する」ということになる。

以上のことから、「それとなく」は、<主体が><ある意図を持って行う自分の行為を>、「K君に、授業態度が悪いことを遠回しに注意する」、「出題されそうな問題を受講者たちに、間接的に、遠回しに言う」、「回りの人々を観察していることを知られないように観察する」というように<相手や周囲に（明確ではなく）間接的に示すことを表す>場合に用いられると考えられる⁶。

次に、「さり気なく」と「それとなく」の意味関係を検討する。

先に見たように、「さり気なく」は「意図を持って行う行為」の場合に用いられる。同様に、「それとなく」も「意図を持って行う行為」の場合に用いられることがわかる。そこで、次の例のように、「さりげなく」を「それとなく」に置き換えられる場合もある。

17 ぼくは子供に画の技術を教えない。どう描いたらよいのかと聞きにこら

⁶: 以下の例では、「それとなく」を<主体が><ある意図を持って行う自分の行為を><相手や周囲に（明確ではなく）間接的に示すことを表す>という意味では説明できない。

③平野をめぐる遠い山々のくらくなるのを眺めていると、身もに入れられるような哀愁がそれとなく心を襲って来る。（藤原他（1985、p. 536））

④彼らは戦争というものを熟知していたから、未経験の将校たちが実際面に於て彼らに頭があがらぬことがそれとなく窺われるのだった。（北杜夫『楡家のひとびと』、p. 1673）

この場合の「それとなく」は概略明確な根拠はないが><その場の状況などから判断して><ある程度予測できることを表す>というように記述することができる。また、この場合の「それとなく」は「何となく、何だか、どことなく、どこか、なぜか、何か」といった語と類義関係にあると考えられる。これについての考察は今後の課題としたい。

れると、ぼくはさりげなく（それとなく）ほかの話をして子供がつよいイメージを得るまで画から遠ざける。（開高健『パニック・裸の王様』、p. 273）

しかし、以下の例では、「それとなく」を「さり気なく」で、「さりげなく」を「それとなく」でそれぞれ言い換えることができない。

- 18 全国で同じものが使われてるのはわかりませんが愛知県公安委員会ではこのテキストが配布されます。講習の際、担当官が出題されそうな部分をそれとなく（*さり気なく）言いますのでしっかり聞いてチェックしておきましょう。（例15を再掲）
- 19 私と内藤はみんなより少し先を歩いた。ソウルの繁華街である明洞を抜け、高速道路下にかかっている歩道橋を渡っていると、その端に幼い子供を抱いた女の物乞いが坐っているのが眼に入ってきた。私は足を早めるようにして通り過ぎたが、内藤はジーンズのポケットから小銭を取り出し、さりげなく（*それとなく）アルミニュームの容器に投げ入れた。（例7を再掲）

これは、「それとなく」の場合の行為は、「相手や周囲に（明確ではなく）間接的に示す」のに対して、「さり気なく」の場合の行為は、「相手や周囲に目立たないように（何か特別な意味を持っていると思われないように）する」ということから説明できると考えられる。

このことを例文に基づいて確認すると、まず、例18において「それとなく」を用いた場合は、「出題されそうな部分を間接的に、遠回しに言っている」ということである。つまり、出題されそうな部分を受講者たちに教えるが、直接教えるのではなく、間接的に、遠回しに教えるということである。だが、「さり気なく」を用いると、「何か特別な意味を持っていると思われないような言い方をしている。言い換えれば、何を言っているかわからないように言っている」ということになる。つまり、文の状況から考えて、「出題されそうな部分を言う」と明言しているのに「何を言っているかわからないように言っている」ということになってしまうのである。従って、「さり気なく」を用いると不自然に感じるるのである。

次に、例19の場合、「それとなく」が用いられないのは、「小銭をアルミニュームの容器に投げ入れる」という行為は遠回しのやり方が考えられないような行為だからである。従って、「それとなく」は用いられないのである。

今度は、「さり気なく」と「それとなく」が相互に交替可能な例を見てみよう。

20 向こうにいる友達にそれとなく（さり気なく）合図を送った。

上の例は「それとなく」を「さり気なく」で言い換えられるが、意味は違う。「それとなく」を用いた場合は、「友達に軽くウインクをするなどのはっきりした行動をとらずに合図を送った」というようにとらえられる。これに対して、「さり気なく」を用いた場合は、「友達ではなく周りの人に、（私の行為に特別な意味があると思われないように）普段通りの様子で、目立たないように合図を送った」ということになる。ここで、「友達ではなく周りの人に」ということになるのは、「さり気なく」は＜主体が＞＜ある意図を持って行う自分の行為を＞＜相手や周囲に目立たないように（何か特別な意味を持っていると思われないように）することを表す＞場合に用いられることから、その友達に「特別な意味を持っていると思われないように、目立たないように」ふるまつては、それが合図を送っているのかどうかわからなくなってしまうからである。

4. まとめ

以上、本稿では「何気なく、さり気なく、それとなく」の3語の個別の意味と相互の意味関係について考察してきた。以下では、分析結果を簡単にまとめておく。

まず、各語の個別の意味の分析結果をまとめると次のようになる。

「何気なく」

＜話し手が＞＜特別な意図を持たずに行行為をすることを表す＞

「さり気なく」

＜主体が＞＜ある意図を持って行う自分の行為を＞＜相手や周囲に目立たないように（何か特別な意味を持っていると思われないように）することを表す＞

「それとなく」

＜主体が＞＜ある意図を持って行う自分の行為を＞＜相手や周囲に（明確ではなく）間接的に示すことを表す＞

次に、各語の相互の意味関係については、次のようにまとめられる。

「何気なく」は「特別な意図を持たずに行行為」の場合に用いられるのに対して、「さり気なく」と「それとなく」は「意図を持って行う行為」の場合に

用いられる。但し、「さり気なく」の場合は、主体の行う行為を相手や周囲に「できるだけ目立たないように、何か特別な意味を持っていると思われないようにする」ことであるのに対して、「それとなく」の場合は、「はっきり表さない。つまり、間接的に、遠回しに示す」ということである。

参考文献

- 李 澤熊 (2000) 「主体の意図に関わる副詞（的機能を持つ表現）について－非意図的であることを表す語を中心に－」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第8号 名古屋大学留学生センター pp. 43–73
- 金水 敏 (1989) 「報告についての覚書」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版 pp. 121–129
- 小矢野哲夫 (1982) 「副詞の意味記述について－方法と実際－」『日本語・日本文化』第11号 大阪外国語大学研究留学生別科 pp. 39–63
- 田 忠魁・泉原省二・金 相順編 (1998) 『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する類義語使い分け辞典』研究社出版
- 半沢幹一 (1984) 「『擬人法』試論」『国語学研究』24 東北大学文学部国語学研究刊行会 pp. 15–26
- 福井信子 (1983) 「ナニゲナイ・サリゲナイ」国広哲弥編『意味分析』東京大学文学部言語学研究室 pp. 36–38
- 藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭編 (1985) 『表現類語辞典』東京堂出版

例文出典

- (1) 検索エンジン goo (<http://goo.ne.jp>)
- (2) CD-ROM版『毎日新聞』(1996)
- (3) CD-ROM版『新潮文庫の100冊』(1995)